

どんな人間でも他の人間たちと関係しないでは生きて行けない。国も国民もそうだ。他の国や他の国民と全く無関係ではやって行けない。それが今の世界だ。

ところで、個人々々の場合でも、団体や国の場合でも同様に、他と付きあうのに必ず自分のうちに、その当の相手についての批判が生まれてくる。これまた、どうしても避けられないことだ。もしその種類や程度が、あまりにも否定的で、その相手との接触を耐えがたくするようであれば、関係を絶つ以外にないであろうが、そうでなければその批判を自分の中で処理しながら相手との関係をつづけて行くことになるわけだが、その場合のこちらの態度を大体三つに分類することができる。

第一は、相手の立場を基本的には全く肯定し得ないが、それを抜きにした点で関係を保つほうが当方にとって有利な場合に、有利と思われる部面だけで付きあうという態度だ。第二は、相手と自分の立場の相違を正確に見きわめて相手を冷静に批判しながらも、お互いの自由と独立を認め許した上で、人間同士や国同士としての連帯性を信じて付きあう生き方。

第三は、相手の実体を正確に掴み認めるだけの定見もなく努力もしないで、ただその時々

分に都合のよい幻想を描いて、それによって相手に対して不当な行為を抱いたりして付き合う生き方である。

言うまでもなく、第二の態度が一番正しいだろうし、望ましくもある。それは誰が考えてもそうであろう。しかし実際においては、なかなかそうは行かないものらしい。ことに我々日本人には、第二の態度を取ることは、常にかなり困難なことのようである。

気質的にも困難だし、それに加うるに近世の日本人が習慣づけられて来たいろいろの種類の種類、絶對主義が、これを妨げている。あらゆる事物を全く肯定するか全く否定しないと気がすまない。否定的な物の中に含まれている肯定的要素や肯定的な事の中にある否定的条件などを認め味わつて、その双方を共に長く保持することが実に不得手だ。人を見るにも先ず一個の人間を意識する前に完全な善人を見たりする。身方でなければ敵といったふうに見てしまうのである。しかも昨日と今日とで真反対のものにひっくり返ったりする。

終戦直後から現在に至るまで、アメリカやアメリカ人を我々がどんなふうに見て来たか、その変化してきた経過を振り返って見て、右のことに思い当たる点はないだろうか。もちろんそれは、アメリカおよびアメリカ人の對日本態度の変転によることもある。

しかし日本人がほとんど前記の第一や第三の態度に終始して来たためもある。終戦直後にアメリカのことを救世主のようにたたえた同じ手口で、現在アメリカを悪魔のようにのしっている人が実に多いのである。ところが、当のアメリカは十年前も現在もただ単なるアメリカであつて、そう變つてはいない初めから今に至るまで救世主的な要素も、悪鬼的な要素も多少ずつは持ったところのタダの人々の集まりであり、タダの国であるに過ぎない。ジタバタしているのは日本人

だけである。

同じようなことが、最近の対中国関係についてもいえるように思う。

最近のジャーナリズムの上に中国肯定、または賛美の言葉が満ちている。当分これは続くであろう。これはある程度まで当然である。中国が我々によいことをしてくれたからだ。中には

「平和攻勢」などといって共産主義国の底意をカンぐったりする向きもあるようだが、底意があらうとなかろうと、中国はもともとわが親しい隣国だ。それが国慶節に多数の日本人を招待してくれたら、李徳全さんを日本によこしているいろいろの親切なことをしてくれている。親切なことをしてくれる相手に感謝し、好意を抱くのは人間の自然だ。なぜならば冷酷なことをされれば、我々は相手を憎むであろうから。相手が共産主義であろうと、何主義であろうと、構うことはない。中国よありがとうと言う我々の言葉から、誠実と正直さが失われるならば、我々の恥である。

それに最近の中国賛美の声は、主として中国に招待されて帰って来た人々の口から出ている。それは国家からご馳走にまねかれてもどって来た者が、隣家のことをほめるようなもので、当然でもあれば、礼儀にもかかっている。

ただ、それらのことと、現在の中国を我々がいかに認識するかということ——今後末永く付き合っていくかねばならぬ中国の本質をどのように把握して、それによって我々の対中国態度を、中国にとっても日本にとっても無理のないものに作りあげることが、すくなくとも、それらのことだけでは不足である。

お客にまねかれた人たちは、客用の席に座ってご馳走を食べて、お庭を拝見して客用の便所へ行って帰って来たのだ。それはそのようなものとして感謝していれば済む。その席やその馳走や

その庭や便所を、隣家全体の実情と思い込んで賛美するならば、それは我々自身にとって有害な誇張におちいることになるうし、同時に先さまにとつても、迷惑なことになるであろう。

あれだけの長い歴史を持った大国である。よいことが百だけ起きていれば、悪いことも五十くらいは起きていると思つてよい。日本人はジタバタ、ウロキヨロしないで、中国が次第に良い国になるよう期待していればよいのだ。

対アメリカや対中国だけとは限らず、現在の日本の置かれた位置や、世界の力関係の中では、今後ますます我々の対外態度は強烈でもあれば微妙でもある各種の鍛錬の下にさらされるだろうことを覚悟していなければならぬ。それには、ただ我々が日本人としての自主性に素直に立ちさえすれば未だ十分には持つていない。ことに、このような事からについて日本国民全体を指導して行くべき立場にあるところの我々インテリゲンチヤが、先づ気分において甘きに過ぎ、現実関係においてゼイ弱に過ぎる。

日本インテリの中の多くの層が近来かなり容共的になつてゐるらしい現象なども、その一例だろう。それにはアメリカの対日本政策に対する失望、反感やソビエトや中国の親日態度などのチャンとした原因のあることではあり、かつ容共それ自体は決していとわしいことでも困つたことでもない。ただその中に往々にして日和見主義が動いていたり、自分と共産主義との対決点のズツと手前のとこで自己幻想的な善意病が發揮されておしかな思われぬ姿がすくなくない。前記の第一または第三の対外態度だ。

トレランスは必要である。ほかのイデオロギーに対して寛容であることだ。しかし、右のような、日和見主義や善意病による肯定は、表面トレランスに見えて実はトレランスなどではない。

むしろその反対のものだ。真のトランスとは、相手を冷静卒直に批判した上で自分と相手との対立点をハッキリさせ、その点では、強く自己を立てたまま、相手との融合点や妥協点を見出して行く努力を持ちつづけることである。前記の第二の態度からのみ出て来るものだ。

日和見主義や善意病は、それ自体として卑小でゼイ弱なもので、好ましくないものであるにとどまらない。そのようなものから我々が抜けださない限り、共産主義のアマルガム（合金）戦術から生れる自他の害悪をまぬがれ得ないであろう。

そして繰り返して言うが、第二の対外態度をとることは、日本人にとって最も困難だ。しかしその困難さをなんとかして克服して行かなければ、極端にいうと、日本が平和に生きて行く道は開けないだろう。

底本.. 「三好十郎著作集 第57巻」三好十郎著作刊行会

1965 (昭和40)年11月16日発行

初出.. 「サンデー毎日(コラム「銅鑼」所載)」

1954 (昭和29)年11月21日号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23)年4月19日